

## 9. プルーン・日本すもも

### ・殺菌剤

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
M1	I C ボルドー 4 1 2	散布	-	-	
25	アグレプト水和剤	散布	収穫 30 日前まで	2 回以内	
3	アンビルフロアブル	散布	収穫前日まで	2 回以内	
11	ストロビードライフロアブル	散布	収穫 7 日前まで	3 回以内	
M3	(チウラム) チオノックフロアブル トレノックスフロアブル	散布	収穫 14 日前まで	3 回以内	
3	トリフミン水和剤	散布	収穫前日まで	3 回以内	
7	パレード 1 5 フロアブル	散布	収穫前日まで	2 回以内	小粒核果類 (灰星病 はすももでの登録)
11	フリントフロアブル 2 5	散布	収穫前日まで	2 回以内	
7	フルーツセイバー	散布	収穫前日まで	3 回以内	小粒核果類
M7	ベルコートフロアブル	散布	収穫 3 日前まで	3 回以内	
2	ロブラール水和剤	散布	収穫前日まで	3 回以内	
M2	石灰硫黄合剤	散布	発芽前	-	落葉果樹

### ・殺虫剤

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
3	アディオンフロアブル	散布	収穫前日まで	2 回以内	
16	アブロードフロアブル	散布	収穫 14 日前まで	2 回以内	
3	イカズチWDG	散布	収穫前日まで	2 回以内	
28	エクシレル S E	散布	収穫前日まで	3 回以内	
12	オマイト水和剤	散布	収穫 7 日前まで	1 回	
20	カネマイトフロアブル	散布	収穫 3 日前まで	1 回	
9	コルト顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	3 回以内	小粒核果類
6	コロマイト乳剤	散布	収穫前日まで	1 回	小粒核果類
-	コンフューザー N	ディスペンサーを対象作物 の枝に巻き付け、または 挟み込み設置する。	成虫発生初期～終期	-	果樹類 (スモモはすももでの登録)
1	サイアノックス水和剤	散布	収穫 21 日前まで	2 回以内	
28	サムコルフロアブル 1 0	散布	収穫 3 日前まで	3 回以内	
3	スカウトフロアブル	散布	収穫前日まで	3 回以内	
UNM	(マシン油) スプレーオイル	散布	発芽前	-	
	トモノール S	散布	発芽前	-	
1	ダイアジノン水和剤 3 4	散布	収穫 21 日前まで	4 回以内	
33	ダニオーテフロアブル	散布	収穫前日まで	1 回	小粒核果類
23	ダニゲッターフロアブル	散布	収穫前日まで	1 回	小粒核果類
-	ナシヒメコン	ディスペンサーを対象作物 の枝に挟み込み、または 巻き付け設置する。	成虫発生初期～終期	-	果樹類 (スモモはすももでの登録)
4	バリアード顆粒水和剤	散布	収穫前日まで	2 回以内	
20	マイトコーネフロアブル	散布	収穫 3 日前まで	1 回	小粒核果類
4	モスピラン顆粒水溶剤	散布	収穫前日まで	3 回以内	
28	ヨーバルフロアブル	散布	収穫前日まで	2 回以内	

注1) 使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決められているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。

注2) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける（「薬剤抵抗性管理」参照）。

注3) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。

品種や気象条件により収穫時期が異なるので、薬剤の使用時期（収穫前日数）に注意する。  
農薬の使用回数は、前年の収穫後から本年の収穫までの期間の使用回数であるので注意する。

時期	散布薬剤と薬量（水 100ℓ当り）	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病害虫〕	注 意 事 項
発芽前 （3月中旬）	<ul style="list-style-type: none"> <li>水 (90 ℓ)</li> <li>石灰硫黄合剤 10 ℓ</li> </ul>	<p>ふくろみ病</p> <p>胴 枯 病</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. ふくろみ病は「ソルダム」に多い。</li> <li>2. 石灰硫黄合剤にかえてチウラムフロアブル（チオノック、トレノックス）の500倍液を散布してもよい。</li> <li>3. 石灰硫黄合剤は皮膚に刺激があるので注意する。</li> </ol>
開花始め	<p>【黒斑病・かいよう病防除対策】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>水</li> <li>I C ボルドー412 3.3 kg</li> </ul>	<p>黒 斑 病</p> <p>か い よ う 病</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 黒斑病の発生園では必ず散布する。</li> </ol>
開花期	<p>殺 菌 剤</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>〔ロブラール水和剤 66 g〕</li> <li>〔トリフミン水和剤 100 g〕</li> <li>のいずれか</li> </ul>	<p>灰 星 病</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 花腐れの防除はその後の灰星病の発生を防止する上で重要である。前年発生の多かった園では必ず防除する。</li> <li>2. 開花期間中に降雨が多い場合は落花直後にも散布する。</li> </ol>
<p>【黒斑病、かいよう病防除対策】</p> <p>伝染源となる春型枝病斑が目立ってくるので、この時期から5月下旬頃まで園内を点検してせん除する。</p>			
<p>【交信かく乱剤の設置】</p> <p>ナシヒメコン（100本/10a）をスモモヒメシンクイの成虫発生前（越冬世代が4月下旬、第1世代が6月上旬）までに取り付ける（別表-2参照）。</p> <p>対象害虫： スモモヒメシンクイ*、ナシヒメシンクイ</p> <p>または、コンフューザーN（200本/10a）をスモモヒメシンクイの成虫発生前（越冬世代が4月下旬、第1世代が6月上旬）までに取り付ける（別表-2参照）。</p> <p>対象害虫： スモモヒメシンクイ*、モモシンクイガ、ナシヒメシンクイ、リンゴコカクモンハマキ</p> <p>*を付した対象害虫に普及済み。</p>			

時期	散布薬剤と薬量（水 100ℓ当り）	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病害虫〕	注 意 事 項
<p><b>【スモモヒメシンクイ防除対策】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 幼虫の食入防止のため、卵～幼虫ふ化期に防除を実施する。成虫は年3～4回発生し、4回発生地帯での防除時期は第1世代が5月上中旬（結実した幼果の肥大が確認できる時期）～6月上旬、第2世代が6月下旬～7月中旬である。第3世代（8月上旬）以降は連続して成虫が発生するため、9月上中旬まで防除間隔があき過ぎないように連続して防除する。発生が多くなると防除が困難になるため、第1世代からの防除を徹底する。</li> <li>2. 各防除時期に約10日間隔で2～3回薬剤を散布する。</li> <li>3. サイアノックス水和剤、ダイアジノン水和剤34の1,000倍液、イカズチWDG1,500倍液、スカウトフロアブル2,000倍液、サムコルフロアブル10の2,500倍液、モスピラン顆粒水溶解剤4,000倍液のいずれかを散布する。</li> <li>4. 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、各薬剤をローテーション使用する。</li> <li>5. 被害果の多くは落下する。幼虫は落果内でも蛹になるので、落下した果実は土中に埋めるなどして処理する。</li> <li>6. <b>イカズチ、スカウトは蚕毒と魚毒に、サムコル及びモスピランは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。</b></li> </ol>			
5 月 上 ・ 中 旬	<p>殺菌剤 アグレプト水和剤 100 g</p> <p>殺虫剤 (別表-1による)</p>	<p><b>黒 斑 病</b> <b>か い よ う 病</b> <b>灰 星 病</b> <b>アブラムシ類</b> <b>スモモヒメシンクイ</b> <b>ウメシロカイガラムシ</b> <b>ハマキムシ類</b> <b>ケムシ類</b></p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 黒斑病、かいよう病の発生地帯では10日おきに2回、左記の剤を散布する。</li> <li>2. アグレプト水和剤は、満開約30～14日前のぶどう樹にかかると種なし果を生じるので、かからないようにする。</li> <li>3. 花腐れ（灰星病）は果実への伝染源となるので早めに摘除する。</li> <li>4. ふくろみ病の被害果は早期に除去する。</li> <li>5. ウメシロカイガラムシの寄生が多い園では、第1世代ふ化幼虫出現期に当たる5月中下旬頃にアプロードフロアブル1,000倍液を散布する。</li> </ol>
<p><b>※【灰星病防除対策】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 収穫1か月前頃からかかりやすくなる。各品種の収穫1か月前頃から収穫までの防除を徹底する。</li> <li>2. アンビルフロアブル、トリフミン水和剤の1,000倍液、フルーツセイバー、ロブラール水和剤の1,500倍液、ベルコートフロアブル2,000倍液、パレード15フロアブルの3,000倍液のいずれかを10日おきに散布する。アンビル、トリフミンはDMI剤、フルーツセイバー、パレードはSDHI剤である。</li> <li>3. 耐性菌の出現防止のため、同一系統薬剤を連用せず、ローテーション使用する。特にDMI剤（FRACコード3）、SDHI剤（FRACコード7）（いずれも混合剤を含む）は年2回以内の使用にとどめる。</li> <li>4. 病果は見つけ次第摘除し、土中に埋める。</li> </ol>			

時期	散布薬剤と薬量（水 1000当り）	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病害虫〕	注 意 事 項
6 月 中 ・ 下 旬	殺菌剤 ※ 【灰星病防除対策】  殺虫剤 （別表－1による）	灰 星 病 炭 疽 病 シンクイムシ類 アブラムシ類 ハマキムシ類 ケムシ類	1. プルーンでは、6月中旬～7月末まで炭疽病の重要防除時期となる。発生園ではチウラムフロアブル（チオノック、トレノックス）500 倍液、ストロビードライフロアブル、フリントフロアブル 25 の 2,000 倍液のいずれかを散布する。ストロビーとフリントはQ○I剤であるので連用をさげ、Q○I剤として年2回以内の使用にとどめる。また、病果は伝染源となるので見つけ次第土中に埋める。 2. スモモヒメシンクイの第2世代の防除時期は6月下旬～7月中旬である。
早生種、中生種の収穫期をむかえるので薬剤の使用時期（収穫前日数）に注意し、防除する。			
7 月 上 ・ 中 旬	殺菌剤 ※ 【灰星病防除対策】  殺虫剤 （別表－1による）	灰 星 病 炭 疽 病 シンクイムシ類 アブラムシ類 ハダニ類 ケムシ類	1. 果実にかかるよう十分散布する。 2. これ以降、果粉溶脱・汚れのおそれがあるため注意する。 3. この時期以降、ハダニ類の発生に注意し、適期防除を心がける。使用する殺ダニ剤は次回に記載の剤とする。なお、殺ダニ剤の使用方法については、りんごの項【別表－3】を参照する。

時期	散布薬剤と薬量（水 100ℓ当り）	発生病害虫名 〔太字は防除 重要病害虫〕	注 意 事 項
7 月 下 旬 ～ 8 月 上 旬	殺菌剤 ※【灰星病防除対策】  殺虫剤 （別表－1による）  殺ダニ剤 （オマイト水和剤（1回） 133 g カネマイトフロアブル（1回） 100 ml コロマイト乳剤（1回） 100 ml ダニオーテフロアブル（1回） 50 ml ダニゲッターフロアブル（1回） 50 ml マイトコーネフロアブル（1回） 100 ml） のいずれか  （ ）は登録の使用回数 （前年収穫後から収穫まで）	灰 星 病 炭 疽 病 シンクイムシ類 ハ ダ ニ 類	1. スモモヒメシンクイの第3世代の防除時期は8月上旬以降である。発生が多い園では散布間隔があかないように注意する。 2. 左記の殺ダニ剤の使用方法については、りんごの項【別表－3】を参照する。 3. オマイトは樹勢の弱っている園及び干ばつ状態の園や、梅雨期及び曇天多雨の続いた後は、葉害のおそれがあるので使用しない。 4. オマイトはなしに葉害を生じる。 5. オマイトとダイアジノン混用しない。 6. コロマイトは高温・乾燥時の散布で葉害のおそれがあるので避ける。 7. ダニオーテは銅剤との混用及び近接散布で効果が低下するおそれがあるので注意する（総括注意2参照）。 8. ダニゲッターは他作物に葉害を生じるおそれがあるので注意する（総括注意1参照）。 9. コロマイトは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。
8 月 中 ・ 下 旬	殺菌剤 ※【灰星病防除対策】  殺虫剤 （別表－1による）	灰 星 病 シンクイムシ類 ハ ダ ニ 類	1. 9月以降に収穫する品種では9月上旬にさらに灰星病防除薬剤を散布する。 2. スモモヒメシンクイの第4世代の防除時期は9月上中旬である。
<b>農薬の使用回数の注意</b> 使用回数は、収穫後から翌年の収穫までの期間の使用回数であるので注意する。			
11 12 月 中 上 旬 ～ 下 旬	〔 水 (96 ℓ) マシン油乳剤 97% 4 ℓ	カイガラムシ類	1. なるべく暖かい日を選んで、丁寧に散布する。なお、マシン油乳剤は、商品ごとに登録内容を確認すること。

【別表－１】殺虫剤の適用害虫に対する使用方法及び効果

- ・使用に当たっては、登録内容を再確認すること（表中の登録内容は令和6年11月30日現在）
- ・使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、薬剤に含まれる成分毎に総使用回数が別途決められているので、それを超えないように注意する。

薬剤の系統	殺虫剤名	IRACコード	使用基準 (収穫前日数)	使用回数(以内)	希釈倍数(倍)	対象害虫に対する効果					注意事項該当番号
						シンクイムシ類	モモノゴマダラノメイガ	アブラムシ類	ウメシロカイガラムシ	ケムシ類	
有機リン剤	サイアノックス水和剤	1	21日	2	1,000	○*		△			4
	ダイアジノン水和剤 34	1	21日	4	1,000	○*		△			4
合成ピレスロイド剤	アディオフロアブル	3	前日	2	1,500	○		○*			1, 2
	イカズチWDG	3	前日	2	1,500	○*					1, 2
	スカウトフロアブル	3	前日	3	2,000	○*		○*			1, 2
I G R 剤	アプロードフロアブル	16	14日	2	1,000				○* (カイガラムシ類幼虫登録)		
ネオニコチノイド剤	バリアード顆粒水和剤	4	前日	2	4,000	○	○	○*			3
	モスピラン顆粒水溶剤	4	前日	3	4,000	○*		○			3
ジアミド剤	エクシレルSE	28	前日	3	5,000	○				○*	3, 5
	サムコルフロアブル 10	28	3日	3	2,500	○*				○	3, 5
	ヨーバルフロアブル	28	前日	2	5,000	○				○*	3
その他	コルト顆粒水和剤	9	前日	3	4,000			○*			5

【効果凡例】 ○\*：効果ある（対象害虫に普及済み） ○：効果ある（対象害虫に未普及） △：効果劣る

【注意事項】（別表－１）

1. 合成ピレスロイド剤は人によってくしゃみやかぶれが出る。
2. 合成ピレスロイド剤は蚕毒と魚毒が極めて強く、使用地域の指定があるのでこれ以外では使用しない（特別指導事項参照）。
3. エクシレル、サムコル、バリアード、モスピラン、ヨーバルは蚕毒が特に強いので桑園付近では使用しない（特別指導事項参照）。
4. サイアノックス、ダイアジノンは蚕毒が強いので注意する。
5. エクシレル、コルト、サムコルは水産動物（特に甲殻類）に影響が強いので注意する。

**【別表－２】 交信かく乱剤の設置時期・量**

交信かく乱剤は殺虫効果がなく、交尾を阻害し次世代の増殖を抑制するものである。交信かく乱剤のみで対象害虫を防除することは不可能であるため、必ず殺虫剤による補完防除を行う。

**交信かく乱剤の種類と設置方法**

使用に当たっては、登録内容を再確認すること（表中の登録内容は令和6年11月30日現在）

薬 剤 名	適用害虫名	設置時期・量	設置方法
コンフューザーN	モモシンクイガ ナシヒメシンクイ スモモヒメシンクイ* リンゴコカクモンハマキ リンゴモンハマキ チャノコカクモンハマキ チャハマキ	スモモヒメシンクイには、 越冬世代成虫の発生前（4 月下旬）、または第1世代 成虫の発生前（6月上旬） に設置する。 コンフューザーN： 200本/10a	ディスペンサーを 対象作物の枝に巻 き付け、または挟 み込み、目どおり の高さに設置す る。
ナシヒメコン	スモモヒメシンクイ* ナシヒメシンクイ	ナシヒメコン： 100本/10a	

\*を付した対象害虫に普及済み。

**【注意事項】（別表－２）**

1. 設置は2割を園の周縁部へ、8割を全体に均一になるように行う。
2. フェロモントラップを設置し、交信かく乱の状況を把握することが望ましい。
3. スモモヒメシンクイに対する効果は、コンフューザーNが3～4か月程度、ナシヒメコンが4か月程度である。

**【総括注意】**

1. **ダニゲッター**は、以下の薬害のおそれがあるので、周辺作物へ飛散しないよう十分注意する。
  - (1) **なし、おうとう**にも適用登録があるが、時期（主に新梢伸長期）、品種、有機リン剤との同時散布や近接散布で、新梢（伸長中の新梢先端部）に薬害を生じるおそれがある。
  - (2) **開花期の水稻**にかかった場合、不稔などを生じるおそれがある。
  - (3) **ぶどう（新芽新葉）**、**キャベツ**、**はくさい**、**こまつな**、**ねぎ**、**みょうが**、**ばら**、**りんどう**、**シンビジウム**等のラン類に対して薬害を生じるおそれがある。
2. **ダニオーテ**は銅を含む製剤との混用及び近接散布で防除効果が低下するおそれがあるため、使用の際は次の事項に注意する。
  - (1) 銅剤との混用はさける。
  - (2) 本剤を散布した後に銅剤を使用する場合は10日間以上散布間隔を空ける。
  - (3) 開花直前に無機銅剤を使用した場合は影響がないと考えられるが、展葉期以降に銅剤を散布した場合は本剤の使用をさける。
3. **チオノック**、**トレノックス**は蚕毒と魚毒が強いので注意する。